

オリゲネスの信仰にみる徳実践の可能性

梶原直美

(和文要旨)

キリスト教において聖書は「正典」であるが、その聖書を重視し、多くの詳細な聖書解釈や講話を残しているのが古代ギリシャ教父オリゲネスである。オリゲネスについては学知と信仰、そして高德によっても知られ、その徳理解についてはすでに拙稿において、弟子タウマトゥルゴスによる記述と徳(アレテー)に関するオリゲネスの聖書解釈を手掛かりに論じた(『宗教と倫理』18号、2018年)。そのなかで、オリゲネスにとって徳は、この生を歩む魂の成長にふさわしい実践すべきこととして理解されていた。では、彼にとって徳の実践は、聖書に示される義務としての、あるいは自身の生における使命を完遂するための行為であったのか。

本稿では、キリスト教徒オリゲネスの信仰者としての側面に注目し、神に対する彼の信仰が徳の実践とどのように関わっていたのか、つまり、信仰に基づき、オリゲネスがいかにして徳行を目指し、実践し得たのか、という問いに答えようとする試みである。本稿は、キリスト教というひとつの宗教における一信仰者のあり方に焦点を当てた論考であり、そこにおいて、信仰者ゆえに持ち得た、徳の実践に対するひとつの可能性を模索する。

キーワード

オリゲネス、徳 (ἀρετή)、キリストの模倣、信仰 (πίστις)、善

(SUMMARY)

The Bible is central in the canon of Christianity, and one man who both valued it and left behind numerous detailed exegetical writings and lectures is the ancient Greek Church Father Origen. Origen is known for his learnedness, faith, and eminent virtue. I have previously discussed his understanding of virtue based on the accounts of his disciple Thaumaturgus, and Origen's exegesis with regard to virtue (ἀρετή) (Journal of Religion and Ethics 18, 2018). Origen's virtue has been described as a practice appropriate for the growth of the soul as one goes through life. Did he see the practice of virtue as a religious obligation shown in the Bible or as a series of acts aimed to fulfill one's mission in life?

This study is an attempt to answer the question of how his faith in God was related to the practice of

virtue, by focusing on Origen as a Christian; that is, how the exegete pursued and was able to practice virtue based on faith. The study on Origen's life as a man who practiced Christianity and explores the possibility that the practice of virtue worked because of his faith.

Keywords

Origen, virtue (ἀρετή), imitatio Christi, faith (πίστις), goodness

はじめに

教会史家エウセビオスは、2-3世紀のキリスト教教父オリゲネスについて詳細に記録しているが、そのなかで、オリゲネスの行為には「真の哲学から生じる正しい行動が実に驚くほど見出され」¹たのであり、「(人々が言うように、彼は)『まことにその言葉は生き方そのものだった。その生き方は言葉そのものだった』ことを示した」²と述べている。そのようなオリゲネスの生き方は、多くの人々を彼の模倣に導くこととなった³。

オリゲネスのこの生き方は聖書に依拠するものであり、徳の実践は魂の成長にふさわしい状態として理解され、遂行されていた。彼は、そのような「正しい行為」、すなわち、魂にふさわしく、聖書に示される徳(ἀρετή)を希求し、自らの生を徳で満たした。このことについては、すでに拙稿において、弟子タウマトゥルゴスによる記述と、徳に関するオリゲネスの聖書解釈の内容を手掛かりに、考察とともに論じた⁴。すなわち、今生にいのちを与

¹ HistEccI VI, 3, 6: “τὰ κατὰ πρᾶξιν ἔργα αὐτῷ γνησιωτάτης φιλοσοφίας κατορθώματα εὖ μάλα θαυμαστά περιείχεν...” (TLG 2018, 002, 6, 5-7.) 翻訳としては、秦剛平訳(山本書店、1987年)を参照した。なお、ここでの「正しい行動」には、倫理的・霊的行為や完全性、徳が含まれると考えられる。Cf. G. W. H. Lampe ed., “κατόρθωμα”, in: *A Patristic Greek Lexicon*, Oxford: Clarendon Press, 1961, pp. 735r-736r.

² HistEccI VI, 3, 7: “οἷον γοῦν τὸν λόγον, τοιόνδε, φασίν, τὸν ρόπον καὶ οἷον τὸν τρόπον, τοιόνδε τὸν λόγον ἐπεδείκνυτο...” (TLG 2018, 002, 7, 1-3.)

³ HistEccI VI, 3, 7: “ἐνήγγεν ἐπὶ τὸν αὐτοῦ ζῆλον” (TLG 2018, 002, 7, 4.) なお、「彼の熱心に与らせることになった」と訳されているが、本稿では「彼の模倣へと導いた」と理解した。Cf. G. W. H. Lampe, “ζῆλος”, in: *op. cit.*, p. 591l (2.).

⁴ オリゲネスにとって徳は、自らの生の歩みにおいて体現され、今生を歩む魂の成長に相応しい、実践すべき善なることとして理解されていた。拙論「生の実践としての「徳」(ἀρετή) —オリゲネスにみる理解から—」(『宗教と倫理』18号、2018年)、97-110頁。

えられている目的は神との合一を達成することなのであり、そこにおいて、徳の実践が必要であると考えられていた。徳の実践が行為者の魂を成長させ、それによって人は神に近づき得るからである。この意味において、徳の実践は、実践するにふさわしいこと、すべきこととして理解されていた。

では、徳の実践は、内発的な方向性とは無関係であったのか。それとも、徳の実践そのものが彼の欲する対象であったのか。本稿ではオリゲネスの著作を手掛かりに、彼の信仰に焦点を定め、徳実践との関わりについて論じる。

1. キリストの模倣

2-4世紀のキリスト教著作家たちは、その背景で思想として展開していた中期ないし新プラトン主義の影響を受けている。オリゲネスもまたこれらのプラトン主義の影響下にあり、それは彼の思想に如実に反映されている⁵。しかし、オリゲネスにとって哲学は弁証法の訓練における有益さ以上のものではなかったことが指摘される。その知のもとで、オリゲネスの関心は聖書解釈にあり、聖書の寓意的解釈をとおして霊的・神学的意味を捉えようとしたのである⁶。プラトン主義が存在や知を体・魂・霊という三層によって理解するのに対し、オリゲネスもまた、聖書を逐語的・道徳的・霊的な側面において解釈した⁷。この聖書解釈法はオリゲネスに特徴的にみられることがしばしば指摘される⁸。そのさい、聖書から導き

⁵ オリゲネスの思想に関して、たとえば佐藤直子は中期プラトン主義、またシェルドレイクは新プラトン主義の影響を指摘する。佐藤直子「解説」（上智大学中世思想研究所編訳『中世思想原典集成精選1ギリシャ教父・ビザンティン思想』平凡社、2008年）、15頁。P.シェルドレイク著、木寺廉太訳『キリスト教霊性の歴史』教文館、2010年（P. Sheldrake, *A Brief History of Spirituality*, Oxford: Blackwell Publishing 2007）、49頁。

⁶ たとえば、A.ラウス著、水落健治訳『キリスト教神秘思想の源流 プラトンからディオニシオスまで』教文館、1991年（A. Louth, *The Origins of Christian Mystical Tradition*, Oxford University press 1981）、101-134頁。

⁷ たとえば、「人間が身体と魂と霊によって構成されていると言われるように、人間の救いのために神の賜物として与えられた聖書も〔同様に構成されているのである〕」。(PeriArch IV, 2, 4: “ὡςπερ γὰρ ὁ ἄνθρωπος συνέστηκεν ἐκ σώματος καὶ ψυχῆς καὶ πνεύματος, τὸν αὐτὸν τρόπον καὶ ἡ οἰκονομηθεῖσα ὑπὸ θεοῦ εἰς ἄνθρώπων σωτηρίαν δοθῆναι γραφή”./ “...ergo homo constare dicitur ex corpore et anima et spiritu, ita etiam sancta scriptura, quae ad hominum salutem divina largitione concerra est.” [Görge-mann-Karpps 313, 28-30.] 邦訳としては、小高毅訳（創文社、1978年）を参照し、〔 〕内は小高の補足に従った。

⁸ たとえば、出村みや子『聖書解釈者オリゲネスとアレクサンドリア文献学』知泉書館、2011年、54頁。

出された道徳的なあり方は、彼の生涯を貫く特徴に重なる。オリゲネスは徳行を、自己の生の先を見据えるなかで救いへとつながる望ましい魂の成長のために実践されるべきであると考えた⁹。その具体的な方法は、キリストを模倣することである¹⁰。

オリゲネスの神観に照らすと、神の御子キリストは人間を神へと導くものである¹¹。キリストは、父の意思を体現する見えない神の像¹²であり、人間はキリストの行為をとおして神を知ることができる¹³。このキリストは「知恵」とも呼ばれ、その知恵を通して、人間は神に近づくことができる¹⁴。それは、人間が理性的存在として創造され、知恵と正義に与る性質を与えられているからである¹⁵。この理性的存在である人間は、自由意志を与えられていることにより、キリストを模倣することで進歩することが可能である一方、怠慢によって後退する¹⁶。ここに関わる、神の像たるキリストは、オリゲネスの複数の著作において様々な側面で理解されているが¹⁷、ここでは、人間イエスとなったキリストおよびその実際的な影響力について、オリゲネスの考えを辿りたい。

2. 神の像としてのキリスト

⁹ 梶原直美、前掲論文、102-109頁。

¹⁰ L.ブイエ著、上智大学中世思想研究所翻訳・監修、大森正樹ほか訳『キリスト教神秘思想史 1 教父と東方の霊性』平凡社、1996年（L. Bouyer, J. Leclercq, F. Vandembroucke, L. Cognet, *Historie de la spiritualité chrétienne*, tomes 1-3, Paris 1960-65）、214頁。

¹¹ PeriArch I, 2, 4.

¹² 「神の像」は“*imago*”, “*εἰκών*”, 「似姿」は“*similitudo*”, “*ὁμοίωσις*”を示す。これらの原語は、ウルガタおよびセプチュアギンタの用語、および文脈に基づいて使用されている。Cf. “*κατ’ εἰκόνα ἡμετέραν καὶ καθ’ ὁμοίωσιν*” (Gen. 1, 6-7.)

¹³ Cf. PeriArch I, 2, 6.

¹⁴ Cf. PeriArch II, 11, 3.

¹⁵ Cf. PeriArch I, 3, 5.

¹⁶ 自由意志については、自身の意志によって善が保持され、自身のものになるために、創造主が自発性と自由を与えたと考えられている。(PeriArch II, 9, 2.) また、怠慢 (*neglegentia*) が徳行の具体的実践としての模倣に対置され、怠慢は徳の対極にあるものと見なされている。(PeriArch II, 9, 6.) なお、小高毅の訳では「怠惰」となっているが、本稿ではオリゲネスの原語に応じ、「怠慢」の邦語を充てた。怠慢および怠惰については、拙論「魂についてのオリゲネスの教説に関する一考察」(『神学研究』57号、2010年)、55-65頁において言及している。

¹⁷ 小高毅は様々な「エピノイア」(相)としてのキリスト理解を挙げている。小高毅『オリゲネス—「ヨハネによる福音注解」研究—』創文社、1984年、140-159頁。

オリゲネスは、『ヨハネによる福音注解』のなかでキリストについて説明するさい、「神と等しくあることを固守すべきことと思ひ世の救いのために奴隷となることを拒むよりも、かえってご自分を低くし、死に至るまで、十字架の死に至るまで従う者となられた時、キリストが善いかたであることは、一層大いなるもの、神聖なもの、真に御父の像として現われたのです」¹⁸。と述べている。ここには、父なる神に「従う者」としての、「父の像」たる御子の姿が提示されており、その姿はキリストの「善い」¹⁹本質のしるしであると認識されている。

キリストについて、『ケルソス駁論』には、「多くの人々の魂を癒し、悔い改めさせ、改善し、これを万物の上に在す神に委ね、言葉や行為や思慮の細部に至るまで、あらゆる業を神の御心に照らし、神の御心にかなわぬすべてを避けることを教えたかた」²⁰と述べられており、人に善いものを与え、父なる神に従順である点において、神の意志を体現した像としてのキリストが示されている。

また、『諸原理について』においてキリストの受肉について説明する箇所には、「主のうちに、死すべき者に共通な無力さと少しも違わぬ人間的な面と、神性の卓越した名状し難い本性にしか当て嵌まらぬ神的な面とを我々は見るので、これほどの驚嘆に啞然とし圧倒された人間の貧しい知性は、どこに心を向け、どのように考え、どこに向かったらよいのかわからない状態に置かれている」²¹と述べられている。ここには、自分を低くし、父に従う人として生きたキリストが示されているが、神でありながらもひとりの人であるということに

¹⁸ ComJohn I, 32, 231: “...θειοτέραν καὶ ἀληθῶς κατ’ εἰκόνα τοῦ πατρὸς τὴν ἀγαθότητα φαίνεσθαι τοῦ Χριστοῦ, ὅτε «ἐαυτὸν ἐταπεινώσε γενόμενος ὑπήκοος μέχρι θανάτου, θανάτου δὲ σταυροῦ», ἢ εἰ «ἀρπαγμὸν ἠγῆσατο τὸ εἶναι ἴσα θεῷ», καὶ μὴ βουληθεὶς ἐπὶ τῇ τοῦ κόσμου σωτηρίᾳ γενέσθαι δοῦλος”. (TLG 2042, 005, 231, 1-6.) 邦訳としては、小高毅訳（創文社、1984年）を参照した。

¹⁹ オリゲネスは、善は徳であり徳は善である、と理解している。Cf. PeriArch II, 5, 3.

²⁰ ContCels I, 9: “πόσω πλέον ὁ πολλῶν ψυχᾶς θεραπεύσας καὶ ἐπιστρέψας καὶ βελτιώσας, καὶ ἀναρτήσας αὐτὰς θεοῦ τοῦ ἐπὶ πᾶσι καὶ διδάξας πᾶσαν πρᾶξιν ἀναφέρειν ἐπὶ τὴν ἐκείνου ἀρέσκειαν καὶ πάντ’ ἐκκλίνειν, ὅσ’ ἀπάρεστά εἰσι θεῷ, μέχρι τοῦ ἐλαχίστου τῶν λεγομένων ἢ πραττομένων ἢ καὶ εἰς ἐνθύμησιν ἐρχομένων;” (TLG 2042, 001, 9, 42-48.) 邦訳としては、出村みやこ訳（教文館、1987年）を参照した。

²¹ PeriArch II, 6, 2: “...ergo quaedam in eo ita videamus humata, ut nihil a communi mortalium fragilitate distare videantur, quaedam ita divina, quae nulli alii nisi illi primae et ineffabili naturae convenient deitatis, haeret humani intellectus angustia et tantae ammirationis stupor percussa, quo declinet, quid teneat, quo se convertat, ignorat”. (Görgemanns-Karpps 141, 5-10.)

については理解の範囲を超えた神秘であると認識されている²²。

このようなキリストの、神に対するあり方については、「主の祈り」の冒頭の呼びかけの言葉に関する注解部から確認することができる。オリゲネスは、『祈りについて』のなかで、「父よ」という呼びかけの言葉に、神に対する全幅の信頼 (παρρησια)²³を認識している²⁴。

以上のように、キリストには、人間の知性による理解を凌駕する愛の行為と、父なる神への信頼と従順が理解される。それはまた、キリストが「父の像」であることを意味している。オリゲネスはこのキリストを模倣することを目指すのが、以下では、まずその根底にある信仰について考察する。

3. イエス・キリストへの信仰

オリゲネスの時代、理性や知性を重視する古代ギリシャ哲学の素養を身に付けた者にとって、「信仰」は最も低級なものと認識され、決して重視されていたわけではなかった²⁵。

スティッドによると、信仰を意味する「ピスティス (πίστις)」には、固い確信と、それを支えるものが含意されており、神やキリストへの信仰、および、神のわざへの信仰、信仰の内容としてなど、多岐にわたる側面によって認識されていた。そのためキリスト教信仰者にとって「ピスティス」の理解は容易ではなかった。そのことを問題視したオリゲネスやアレクサンドリアのクレメンスは、信仰の具体的内容を、キリスト教の教義に関する信仰箇条を受け入れることに変えていった²⁶。

たとえば、信仰について言及されている「ヨハネによる福音書」13章29節を注解するさい、オリゲネスは信仰および信じる対象を、唯一の神の現存、創造の業、イエスの神性、聖

²² PeriArch II, 6, 2.

²³ “παρρησια”という語には、告白を伴う確信、および信仰という意味が指摘される。(G. W. H. Lampe, “παρρησια”, in: *op. cit.*, pp. 1044r-1046l.) オリゲネスは聖霊もまた神への全幅の信頼を持ち (PeriEuch 14, 5; 24, 5)、聖霊によって人は神を父と呼び、すなわち信頼することが可能であると理解している (PeriEuch 22, 2-3)。

²⁴ PeriEuch 22, 1.

²⁵ E. R. ドッズ著、井谷嘉男訳『不安の時代における異教とキリスト教』日本基督教団出版局、1981年 (E. R. Dodds, *Pagan and Christian in an Age of Anxiety*, Cambridge University Press 1965)、144頁。

²⁶ C. スティッド著、関川泰寛、田中従子訳『古代キリスト教と哲学』教文館、2015年 (C. Stead, *Philosophy in Christian Antiquity*, Cambridge: Cambridge University Press 1994)、140-143頁。これは、論理的に構築された様々な思想から、合理性によって語ることはできない信仰を有するキリスト教を擁護するための選択であったと言えるであろう。

霊のほか、「自由意志を有する者として、罪を犯すことで罰せられ、良い業をなすことで尊ばれること」²⁷などの教義的な一般的事項に関する内容も含めている²⁸。

その説明に先立って、「完成の域に達した人、すべての徳を有している人は、それぞれの完全性を得ているので、完全な知恵、完全な節制を有しており、敬神の念にしても他の徳にしても同様です。同じく、信じるという徳において完全な人は全き信仰を有していると言えるでしょう」²⁹。と述べられているが、ここでは「信じる」という内的行為に焦点が当てられ、信じることは「徳」のひとつとして理解されている³⁰。また、完全な信仰に基づく徳が大いなるものであると認識されている³¹。つまり、信じることはひとつの徳であるが、大いなる徳は完全な信仰に依拠し、すなわち完全な信仰が不可欠なものであると理解されている。

しかし同時に、信仰はイエス・キリストにも向けられる。ここでは、『ケルソス駁論』における叙述をもとに、イエス・キリストへの信仰について考察する。

この書は、哲学の優越性によってキリスト教の教えを貶める同時期の哲学者ケルソスへの反論としてオリゲネスが著した文書であり、キリスト教の信仰に関する批判に対しての反論が叙述されている。出村によると、この書はケルソスの主張によって動揺させられる信仰者を念頭に置きながら執筆されており、彼らのような「単純な信仰」の保持に始まり、それらがより発展した学知を伴う信仰を形成するに至ることが目的とされていた³²。

オリゲネスはケルソスへの反論のなかで、見通せない将来に希望を抱かせることのでき

²⁷ ComJohn XXXII, 16, 189: “Δεῖ δὲ καὶ εἰς τὸ ἅγιον πιστεῦναι πνεῦμα, καὶ ὅτι αὐτεξούσιοι ὄντες κολαζόμεθα μὲν ἐφ’ οἷς ἁμαρτάνομεν, τιμώμεθα δὲ ἐφ’ οἷς εὖ πράττομεν”. (TLG 2042, 005, 189, 1-4.)

²⁸ ComJohn XXXII, 16, 183-197.

²⁹ ComJohn XXXII, 15, 178: “Ὡσπερ γὰρ ὁ τέλειος καὶ πάσας ἔχων τὰς ἀρετάς, τελείαν ἐκάστην ἀναλαβὼν, τελείαν ἔχει τὴν σοφίαν καὶ τελείαν τὴν σωφροσύνην, οὕτω δὲ καὶ τὴν εὐσέβειαν καὶ τὰς λοιπὰς· οὕτως ἂν τις εἴποι τῇ τοῦ πιστεῦναι ἀρετῇ τέλειος τὸ πᾶσαν ἔχειν τὴν πίστιν”. (TLG 2042, 005, 178, 1-5.) また、「信仰」および「信じること」の語は互換的に用いられている。

³⁰ オリゲネスには、人間について、徳、信仰、覚知 (γνώσις) の点で成長し、完成に向かう存在であるとの理解がみられる。(Cf. ComJohn frag. 7.) これらの要素は、魂が成長と完成に向かうプロセスにおける、具体的な状態を示している。

³¹ ComJohn XXXII, 16, 196:これは稀有なものであると述べられている。

³² 出村みや子「オリゲネス『ケルソス駁論』における真理探究の構造—エンキュクリオス・パイディアの検討を中心に—」(『中世思想研究』30号、1988年)、46頁。

る信仰の重要性を示すにあたり、「あらゆる人間的な事柄が信仰にかかっているゆえに、彼ら [哲学者たち] よりも神を信じることのほうが、どうしてより良識にかなってはいないだろうか」³³。と述べている。ケルソスが、理性や理性的指導者に従って教えを受け入れるよう人々に勧めていたからである³⁴。理性と知に富み、それらを用いてキリスト教の教えを理解し、教示していたオリゲネスは、「もしも万人が生活に関する事柄を放棄して、哲学の営みに専心することができるならば、この道以外の他の道を辿るべきではない」³⁵。と、理性や知³⁶の重要性について認識する。しかし、大多数の人々がそのような哲学に専心できない状況のなかで、理性に根拠を置かない単純な信仰を持つ者については、その魂が、むしろイエス・キリストによって癒しや悔い改めに導かれ、よりよい方向に導かれ、神の意思から逸脱する思慮や言動を避けることを教えられることが可能であると理解している³⁷。

さらに、「わたしたちは、信仰が多くの人々にとって有益だとみなしているので、すべてのものを捨てることができず、論拠 (ロゴス) の探究についてゆくことができない人々にも非理性的に信じるように教えることに同意している」³⁸との叙述からは、多くの信仰者が初歩的な段階を歩む状況を受け、いかなる信仰をも、様々な段階を含む多岐にわたって有益なものともみなしていることが明らかである³⁹。

ただし、完全な信仰に基づくものは稀有であるとの判断が、以下の叙述に表れている。

「聖書 (ロゴス) に意味するところによれば、理性と知恵によってこれらの教義に同意

³³ ContCels I, 11: “ Πῶς δ’ οὐκ εὐλογώτερον, πάντων τῶν ἀνθρωπίνων πίστεως ἡρτημένον, ἐκεῖνον μᾶλλον πιστεύειν τῷ θεῷ;” (TLG 2042, 001,11, 3-5.)

³⁴ Cf. ContCels I, 9.

³⁵ ContCels I, 9: “... εἰ μὲν οἷόν τε πάντας καταλιπόντας τὰ τοῦ βίου πράγματα σχολάζειν τῷ φιλοσοφεῖν, ἄλλην ὁδὸν οὐ μεταδιωκτέον οὐδενὶ ἢ ταύτην μόνην”. (TLG 2042, 001, 9, 14-16.)

³⁶ オリゲネスは、始原のときに神が「理性的被造物」を創造したとみなし、これを「精神」(ヌース)と呼び、「知性的被造物」とも換言している。(PeriArch II, 9, 1.) これらが自らの状態と品位から外れたものが「魂」と呼ばれる。(PeriArch II, 8, 3.) 魂を持つ人間の本来の状態として、理性や知性が認識されていた。

³⁷ただし、神の助けなくして人々の中に有益なことは何も生じないのであり、神の助けを豊かに受けた存在は救い主イエスだけである。(ContCels I, 9.)

³⁸ ContCels I, 10: “... ἡμεῖς μὲν παραλαμβάνοντες αὐτὴν ὡς χρήσιμον τοῖς πολλοῖς ὁμολογοῦμεν διδάσκειν πιστεύειν καὶ ἀλόγως τοὺς μὴ δυναμένους πάντα καταλιπεῖν καὶ ἀκολουθεῖν ἐξετάσει λόγου...” (TLG 2042, 001, 10, 1-5.)

³⁹ マクガッキンもこの点を指摘している。J. A. McGuckin, “faith”, in: *A-Z of Origen*, London: SCM Press 2006, pp. 99-100.

することは、単純な信仰によって同意するより遥かに優っていること、また、状況によっては、人々がまったく途方に暮れてしまうのを放っておかないために、ロゴスがこれ「[単純な信仰]をも望んでいることは、イエスのまことの弟子のパウロの言葉からも明らかである」⁴⁰。

ここからは、教義への同意において、理性（ロゴス）と知恵に対して信仰が劣位に置かれているようにも理解し得るが、キリスト教徒が愚かさを善とみなすと批判するケルソスへの反論という文脈にあることから、両者の優劣ではなく、教義の理解には理性と知恵が必要であるという事実認識を述べる意図のもとに書かれているものと考えられる。

このように、知性をもって教義である信仰箇条を理解し受け入れるという側面における信仰の重要性と、多くの人がそれに至らない現実について述べられている。この内容は、知恵と宣教の愚かさについて述べる「コリントの信徒への手紙一」1章21節の言葉に続く。オリゲネスはこの箇所から、実際には人間が神の知に至らないために、愚かな宣教としてのキリストの死と復活という出来事がもたらされたと説明する。それは、さらに同1章23-4節の言葉に続き、十字架に付けられた、かつ、神の力、神の知恵であるキリストへの信仰の重要性が提示される。すなわち、「それゆえこれによって、神の知恵の中で神が知られるべきであったことは明白である。しかし、そうならなかったので、次に神は信じる人々を、端的に愚かさを通じてではなく、宣教に関する限りの愚かさを通じて救うことをよしとされた」⁴¹。このように、オリゲネスは、理性や知恵を重視し、それらによる教義の受容としての信仰を重視するが、それ以上に、「愚かな」キリストへの信仰の重要性を提示している。

4. 信仰と徳の実践⁴²

この信仰は、それ自体に留まらず、人間の生き方と結びつくものと理解されている。オリゲネスは、「信じる」という内的な行為がきわめて不確定な結果に向かってであっても行動

⁴⁰ ContCels I,13: “Ἐτι δὲ ὅτι καὶ κατὰ τὸ τῷ λόγῳ ἀρέσκον πολλῶ διαφέρει μετὰ λόγου καὶ σοφίας συγκατατίθεσθαι τοῖς δόγμασιν ἢ περὶ μετὰ φιληΐας τῆς πίστεως, καὶ ὅτι κατὰ περιστάσιν καὶ τοῦτ’ ἐβουλήθη ὁ λόγος, ἵνα μὴ πάντῃ ἀνωφελεῖς εἴση τοὺς ἀνθρώπους, δηλοῖ ὁ τοῦ Ἰησοῦ γνήσιος μαθητῆς Παῦλος εἰπών”. (TLG 2042, 001, 13, 23-28.)

⁴¹ ContCels I, 13: “Σαφῶς οὖν διὰ τούτων δηλοῦται ὅτι ἐν τῇ σοφίᾳ τοῦ θεοῦ ἐχρῆν ἰνώσκεσθαι τὸν θεόν. Καὶ ἐπεὶ μὴ τοῦτο γεγένηται οὕτως, δεύτερον εὐδόκησεν ὁ θεὸς σῶσαι τοὺς πιστεύοντας οὐχ ἀπαξ ἀπλῶς διὰ μωρίας ἀλλὰ διὰ μωρίας ὅσον ἐπὶ κηρύγματι”. (TLG 2042, 001, 13, 31-35.)

⁴² 善は徳と考えられているため、善の実践は徳行を意味する。本稿、注19、参照。

を生起させる力を持つことに触れ、イエスの弟子たちを例に挙げながら、彼らの信じる対象が「数々の極度の危険と不名誉とみなされる死を人々のために耐え忍んだかた」⁴³であるイエスであったため、「最初に彼の教えに仕えるべく説得された人々〔弟子たち〕にも、極度の危険と常に予想される死を引き受け、人々の救済のために世界中を遍歴することを教えた」⁴⁴と述べている。ここでは、人々の救済を目指して苦難を歩んだイエスの生き方そのものが弟子たちの模範として示されている。弟子たちにとってそのようなイエスを信じることは、自身に与えられた働きを、いかなる悪い見通しのなかにあっても遂行する希望と力を与えるものであり、後にはそのような彼らの信仰もまた、人々から受け入れられることとなった⁴⁵。

ここで、オリゲネスが信仰について述べている『ローマの信徒への手紙注解』から、彼の理解を確認したい。

オリゲネスは、「ローマの信徒への手紙」3章29-30節の注解部で、「信仰から義とされる者は、信仰から発端を得て、善行を成し遂げることによって完全なものとなり、信仰によって義とされる者は、善行から出発して、信仰によって完全なものとなるのです。こうして、両者が互いに強く結ばれており、一方は他方によって完成されるのです」⁴⁶と述べている。ここでの義とは信仰によってのみ神から与えられる義認の結果であるが、オリゲネスはこれを善行の実践と関わらせ、信仰と善行は神による義認を介して人の完成に関与するものと理解している。

また、同書4章1-8節の注解部に関する「神から義とされる端緒は、義とされる方を信じる信仰なのです。そして、この信仰は、義とされた時に、雨の後の根のように、魂の深みにしっかりと根を下ろします。その結果、神の律法によって耕され（教化され）始めると、行

⁴³ ContCels I, 11: “μετὰ μεγάλων κινδύνων καὶ θανάτου νομιζομένου ἀτίμου, ἃ ὑπέμεινεν ὑπὲρ ἀνθρώπων” (TLG 2042, 001, 11, 19-20.)

⁴⁴ ContCels I, 11: “διδάξας καὶ τοὺς ὑπηρετεῖσθαι τῇ διδασκαλίᾳ αὐτοῦ ἐν τῇ ἀρχῇ πεισθέντας μετὰ πάντων κινδύνων καὶ τῶν ἀεὶ προσδοκωμένων θανάτων τολμῆσαι ἀποδημῆσαι πανταχοῦ τῆς οἰκουμένης ὑπὲρ τῆς τῶν ἀνθρώπων σωτηρίας;” (TLG 2042, 001, 11, 19-24.)

⁴⁵ E.g., Acts 4, 23-37.

⁴⁶ ComRom I, 3, 10: “..., qui ex fide justificantur, initio ex fide sumpto per adimpletionem bonorum operum consummantur, et qui fidem justificantur, a bonis operibus exorsi per fidem summam perfectionis accipiunt. Ita utrumque sibi adbaerens alterum ex altero consummatum”. (PG 14, Col. 957.) 邦訳としては、小高毅訳（創文社、1990年）を参照した。なお、「徳」は「善きもの」のひとつとして理解されている。Cf. ContCels I, 24.

いという成果をもたらす枝が〔魂〕の内に成長するのです」⁴⁷。という叙述からは、義認によって信仰がより確かなものとなり、それが善の実践に結びつくという理解を看取し得る。

これらに加えて、ひとりの人間として現実を生きるオリゲネス自身の信仰が確認される内容について触れておきたい。

理性と知性によって聖書を理解し、言葉を尽くして執筆を進めるオリゲネスの叙述のうち、「ローマの信徒への手紙」8章35-37節の注解部では、他の箇所と異なり、「私は」という主語と、強い情動的な言葉を伴う告白が目立つ。この聖書箇所は、誰も、いかなる苦難も、キリストの愛から自分たちを引き離し得ないというパウロの言葉で占められている。これについて、オリゲネスは、「たとえ、この世の剣が私の首に振り下ろされようとも、神への一層大きな愛を私にもたらすのです。…私の全生涯を迫害と危険の内に過ごしても、私は言うでしょう。…」⁴⁸と、ここまでを「私」として述べている。それに続いて、「この愛に熱中している限り、私どもは苦しみを感ずることはないのです。実に、私どもを愛し、私どもの愛情をご自分に引き寄せられた、この方の愛が、肉体に対する拷問と苦痛を私どもに感じさせなくするのです⁴⁹」と、キリストへの自らの信仰を表しながら、キリストの愛ゆえに、迫害によっても苦しむことはないのだと断言している。これらの言葉は決して単なる大言壮語ではなく、迫害の危機を伴う現実のなかで、聖書の言葉に導かれて述べられた言葉である。またここには、かつて殉教を遂げた父の姿や、自らもまたそれを願うほどであった彼自身、それ以上に、十字架の死を引き受けられた御子キリストが重なった可能性もあるであろう。いずれにせよ、ここにはキリストに対するオリゲネス自身の実存的な信仰と同時に、神から与えられる愛の自覚と、神に対する彼自身の愛を確認することができる。

そのようなオリゲネスの神への信仰が、彼の多くの著作の内容と違わず、彼自身の善行に一致することは容易に理解できる。そしてそれは、同じく彼の叙述から、彼の善行の根拠が、理性による判断には留まらなかったことが示唆される。

⁴⁷ ComRom I, 4, 1: “Initium namque justificari a Deo, fides est quae credit in justificantem. Et haec fides cum justificata fuerit, tamquam radix imbre suscepto haeret inanimate solo, ut cum per legem Dei excoli coeperit, surgani in ea rami qui fructus operum ferat”. (PG 14, Col. 965.)

⁴⁸ ComRom I, 7, 11: “Si ergo gladius mundi venerit super cervices meas, majorem mihi ad Deum conciliat charitatem... Si enim totam vitam meam in persecutionibus et periculis agam, dicam quia...”. (PG 14, Col. 1132.)

⁴⁹ ComRom I, 7, 11: “Dum enim in illius amore pendemus, sensum doloris non recipimus. Illius enim charitas qua nos dilexit, et nostrum ad se rapuit affectum, cruciatam corporis, et dolorem non sentire nos facit”. (PG Col. 1132.)

さらに、善なる神の権威下に身を置くことを勧める「ローマの信徒への手紙」13章3-4節および、隣人愛を勧める同書13章10節の注解部において、オリゲネスは以下のように述べている。

「このような者ら⁵⁰は、律法を恐れています。ところが、善を行う者、つまり律法への恐れによってでなく、善への愛によって善いことを行う者は、もはや文字の律法の下ではなく、霊の律法の下に生きているのです」⁵¹。

「心を尽くし、思いの限りを尽くしてキリストを愛する者が、キリストの喜ばれないことを何かするというようなことは、決してあり得ないのです」⁵²。

つまり、神との契約を破棄することによる報いを自らのために恐れるのではなく、ただキリストを愛し、キリストの喜びを欲することにより、そこから善行が生まれ得るのである。

5. 徳実践の可能性

ここで、徳の実践も含め、行為選択の可能性について考察したい。

オリゲネスの思想によると、人間は、幾世代にもわたって生を繰り返す魂という存在に帰され、最終的にすべては救済のなかに置かれる⁵³。しかし、そのことは、自らが自身の生成する現在の善悪と切り離されることを意味するわけではない。むしろ、人間は理性を持つがゆえに⁵⁴、生きる過程での選択の善悪が問われ、それに応じた報いを受ける⁵⁵。ただし、人間は最も弱い理性的存在者であり、あらゆるものを理性によって考察できるわけでない

⁵⁰ 不法な者、不従順な者、神を恐れぬ者、人を殺す者などが例示されている。Cf. ComJohn II, 9, 28.

⁵¹ ComRom II, 9, 28: “Ipsi enim sunt qui timent legem. Qui autem facit bonum, hoc est qui non metu legis, sed amore honi facit quod bonum eat, iste jam non sub lege litterae, sed sub lege spiritus vivit”. (PG Col. 1229.)

⁵² ComRom II, 9, 31: “nec fieri ulto pacto potest, ut qui ex toto corde, et ex totis visceribus suis diligit Christum, faciat aliquid quod non placeat Christo”. (PG 14, Col. 1232.)

⁵³ 拙論「魂についてのオリゲネスの教説に関する一考察」(『神学研究』57号、2010年)、61頁。

⁵⁴ Cf. PeriArch III, 1, 3.

⁵⁵ Cf. ComJohn XXXII, 16, 189.

め、救いを得るには人間の努力だけでは不十分であり⁵⁶、神の助けが必要である⁵⁷。ここに、仲介者としてキリストが与えられた⁵⁸。

オリゲネスの著作においてみられる、キリストのエピノイア⁵⁹は、人間に示される神の性質である。そのなかで「善」が際立ち、その善は、キリストの受難において最も明らかとされたことが指摘されている⁶⁰。これは何を意味するのか。

オリゲネスは、「ヨハネによる福音書」1章4-5節の注解をおこなうなかで、「善く生きることを伴う徳な[生命]」⁶¹としてのロゴスであるキリストを示唆し、人間はそのロゴスの参与により「生きる」ものとなったことを教える。そして、「光」が闇に捕らえられないものであることを説明するなかで、「神が悪の存在を許される理由は明らかです。即ち、それは徳の偉大さを示されたためです」⁶²と述べている。ここで、光は真理、闇は誤謬と欺瞞の象徴として説明されており、「徳」は、このような闇のなかにおける光の臨在を意味する。

ここから考察すると、キリストが光として闇のなかで誕生したことは徳の受肉でもあり、それはこの深淵なる闇のなかで、キリスト自身が受難を引き受ける徳とも理解し得る。この理不尽な闇のなかでだからこそ、そのようなかたちで光が示されなければならなかった。このことを信仰によって認識し、キリストに示される徳が人間に光として知覚されるなら、キリストの受難をとおして示される徳によって自らの闇もまた照らされ、光である徳の持つ方に影響されないではいられないのではないか。

おわりに

以上、当時の哲学者たちを凌駕するほどの知性を有していたオリゲネスの信仰、およびそれと徳実践との関わりについて考察した。

キリスト教と当時の背景にあった思想との違いのひとつに、徳概念がある。背景にあったのは、ギリシャ由来の、いわゆる枢要徳といわれる内容を含む徳概念であった。哲学におけ

⁵⁶ PeriArch III, 1, 19.

⁵⁷ PeriArch III, 1, 24.

⁵⁸ PeriArch II, 6, 1. この前後で、オリゲネスは、人間が自らの力のみでは善に向かい得ないことを繰り返し述べている。

⁵⁹ 本稿、注17、参照。

⁶⁰ 小高毅、前掲書、140-159頁。なお、オリゲネスはこの徳をキリストに帰し、キリストを「(徳の)源泉(πηγή)」、 「(徳の)端緒(ἀρχή)」とも称している。Cf. ContCels I, 57.

⁶¹ ComJohn frag. 2: “...τοῦ κατ’ ἀρετὴν καθ’ ὃ συμβαίνει εὖ ζῆν” (TLG 2042, 006, 3, 15-16.)

⁶² ComJohn frag. 3: “...ὁ θεὸς εἶναι κακίαν, δυνάμενος κωλύσαι, ἵνα τὸ μέγεθος τῆς ἀρετῆς δειχθῆ”. (TLG 2042, 006, 3, 25-26.)

る徳はそれを理解する者の理性に訴え、徳行へと導いた。しかしキリスト教において、徳は、哲学における価値観のなかには留まらない「愚かな」内容が重要な意味を形成することとなった。それは、不完全で貧しい人間の救いのためにこそ遂げられた十字架の死、人々の希望の源泉となった復活の出来事、そしてそれらすべてに通底する神の愛である。

オリゲネスの示す徳の実践として求められていた「キリストの模倣」は、神のようになることを目指すが、それは、人間を超越し、神のような絶対的な「力」を持って世界のうえに君臨することを意味するのではなく、現実を生きるなかで、肉となった神、キリストに示される愛に導かれ、自らもまた神に従順で愛を行う者でありたいと願い、そうあり続けることを選ぶあり方であると言えるであろう。

オリゲネスの徳の実践は、彼の生涯と教えに鑑みれば、信仰に支えられるものであったと言える。神を信頼し、自身を委ねて歩む生のなかで、信仰は神の喜びを求める熱意を生じさせる⁶³。ゆえに、そこにおける徳の実践は、宗教的な正しさや義務、命令である以上に、愛であり善であるキリストの姿に導かれ、自らのうちに喜びを生み出す行為であった。それがすなわち、本来の自身のあり方、また、歩みであると理解されることとなる。オリゲネスには、まさに自分の救いのために人間イエスとして生まれ、苦しみを引き受け、命をささげてくださったキリストの存在が不可欠であった。オリゲネスの徳の実践は、信仰の対象であるキリストの姿に強く結びつき、自らが贖われた体験のなかから生じるものであったからである。

謝辞 本研究は、JSPS 科学研究費（課題番号 20K12821）の助成を受けて行われた。

<凡例>脚注においては以下の略記を用い、脚注の聖書巻名は MLA の略語に従った。

ComJohn : 『ヨハネによる福音注解』

ContCels : オリゲネス 『ケルソス駁論』

ComRom : オリゲネス 『ローマの信徒への手紙注解』

FragJohn : オリゲネス 『ヨハネ福音書断片』

PeriArch : オリゲネス 『諸原理について』

PeriEuch : オリゲネス 『祈りについて』

HistEccl : エウセビオス 『教会史』

⁶³ ただし、その熱心さには吟味される必要がありそのためにオリゲネスは理性をも重視する。Cf. ComRom II, 8, 1.

梶原：オリゲネスの信仰にみる徳実践の可能性

Görgemanns-Karpps: H. Görgemanns und H. Karpps hrsg., *Origenes vier Bücher von den Prinzipien*, *Texte zur Forschung* Bd. 24, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1976.

TLG: Thesaurus Linguae Graecae, Irvine: UCLA, 2009.

PG: Migne, *Patrologiae cursus completus, series graeca*, 1857-1866.

本稿では著書名に続いて巻・章・節番号を記載する。原典の記載にあたっては同様であるが、TLGを使用するさいには、作品番号と節番号およびテキストの行数を付記した。